
少し痛んだ。

りいち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少し痛んだ。

【Nコード】

N2424J

【作者名】

りいち

【あらすじ】

執着もなく、人を愛さない男が一年間で見出した悲しい愛の行方。2人はきつと愛し合っていたのだろう。それがたとえ、歪んでいても。

ある朝、女はばつさり髪を切っていた。

俺が起きた時にはもう、部屋にあった女の私物は全てなくなっており、女も化粧を終え、ジーンズとTシャツに着替えたあとだった。胸のところまで綺麗にそろっていたあの長い髪が、たったの一夜にして耳たぶの下までしかなくなっている。しかも毛先はバラバラで、誰がどう見ても素人がそこらにあるハサミで適当に切ったように下手くそである。

髪色だけは相も変わらず生まれつきの焦げ茶色だが、ショートカットになった女の姿は全くの別人に見えた。

「何で切った」

「忘れたい男がいるからよ」

意外と古臭いことをする奴だ。大きなスポーツバッグを隣りに置いたまま、鏡を見る女を眺めながらそんなことを思った。

髪を切るくらいで忘れられる相手でもないだろうに。しかし声に出さなかったのはその相手が俺だと知っていたからだ。

一年間、俺と女はこの狭いアパートで暮らしてきた。どちらが先に言い出したかは覚えてない。何となく一緒にいて、何となく一緒に住むようになったのだ。

部屋には俺と女の趣味が入り混じった統一感のないインテリアばかりだが、雰囲気は馴染んでいるから不思議だ。いや、むしろこのちぐはぐなインテリアたちが、一年の間でこの部屋の雰囲気を自然と作っただろう。

一年間、俺は女を抱き、キスをし、休日には女が行きたいと言えば

映画や買物にも着いて行った。大きな喧嘩もなく、女も女で、俺が仕事から帰るといつも夕飯を作って待っていた。

俺が他の女とホテルに泊まっていた夜も、次の日家に帰ると気付いているだろうに文句ひとつ言わずに、お帰りと言っような女だった。お互い余計な干渉をすることもなく、求めれば抱き合い、いつだって俺の帰る場所を作ってくれる女に対して罪悪感はあるでなかった。在るのは少しの情と安心感。

「失恋したから髪を切るのか」

「そうよ」

「だせえ。馬鹿じゃねーの」

そう言っって嘲笑っってみるが、女は何も答えず、特に怒った様子もない。ただ鏡に映るショートカットの自分を睨み合い、時折指で髪の毛を弄った。

一人の女に執着することのなかった俺が、一年間も同じ女と同じ部屋で暮らすなんて一年前は考えたこともなかった。俺も少しは変わったのかもしれないと、26年間生きてきて初めて自分自身を見直した矢先のことだ。

急に何もかもが嫌になった。

文句を言わないこの女も、それに甘えて他の女を抱く俺も、この部屋の柔らかい雰囲気も何もかも、生温くて気色が悪い。

人はそう簡単には変わらないらしい。少しは変わったと思っていた自分自身も、やはり心根は誤魔化せなかったようだ。常に変化の中でしか生きて来なかった俺が、一人の女との安息に一年間も沈んでいたことがそもそもの奇跡なのだ。

最後の数ヶ月、俺は事ある事に女を殴っていた。これまで色んな女

と付き合ってきた、あるいは寝てきた。ワガママで面倒な女も腐る程いたが、相手に手を上げたことなど一度だつてなかったのに。

しかし俺はこの女を殴つたのだ。泣いて喚いて、それでもそばにいたいと縋つてきやがれ。そしたら俺も愛してやる、と。しかし女は決して泣き言を言わなかった。ただただ色のない瞳で俺を見上げるもんだからいたたまれなくなってまた殴つた。

お前、出ていけよ。

そう言つたのは昨日のことだ。本当に離れたいわけではなかった。しかしこのままでは俺はこの女を本当に殺してしまうかもしれない、と急に怖くなったのだ。そして何より、女と一緒にいることで変わってしまう自分に恐怖というものを感じた。

その瞬間、女は初めて泣いた。静かに肩を震わせたあと、女の瞳から涙が零れたのを見た。もう少し嬉しいものかな、と思つたが。泣け、と殴り続けても泣かなかつた女の涙を見たのだから。しかし現実では、俺は女の涙を直視することすらできなかったのだ。

そして今、同じように女は鏡に向かって涙を流している。それを見た瞬間、思わずぎよつとした。

多分、俺は今一番見たくなかつたものを見たのだ。

「なに泣いてんだよ」

「うるさい」

「おい」

気付くと俺は、自ら手を伸ばして女の体を引き寄せていた。自分でやったにも関わらず、顔に残る痣を隠すように無理やり胸に押し付ける。

やめてよ、と力強く女は逃れようとしたがそれよりも強い力で抱き締めると大人しくなった。

いや……違う。

これは抱き締めたのではない。

締め付けたというのだ、きつと。

「愛してやれなくて、ごめんな」

女は俺を愛していた。そしてきつと、俺も女を愛していたのだと思う。

だがそれは、女の愛とは違っていた。女が愛してくれたのと同じように、俺もまた女を愛してやれれば良かった。しかし愛は、努力とは正反対なのだろう。

でていく、と女は呟いた。

もう出て行かなくてもいいと思ったのだが自分で言った手前今更引き止める気にもなれず、ああと短く頷けば物凄い量の後悔の念が胸を覆った。

さっきのは間違いだと笑って引き止めれば、もしくは嘘でも何でも、愛していると吐けば、女は出て行かないだろう。

しかしそれをしなかったのは、この先一緒にいても同じことの繰り返しだと分かっていたからだ。今別れなければ、俺はもう二度と女を手放さなくなるかもしれない。部屋に閉じ込め鎖を付け、愛故と称して殴り続けるだろう。

女を追い出す、強いて言えばそれが俺なりの精一杯の愛だった。

短い髪を揺らして玄関のドアを開ける女の後ろ姿は違う人間のようだった。俺は、女の長い髪が嫌いじゃなかったのに。

別れの言葉はなかった。

俺は何も言えなかった。女も何も言わなかった。
そして彼女は一度も振り向かず、玄関のドアを閉めた。きっと、
世界で一番重いドアを。

いや、もういい。きっとすぐに忘れるだろう。女も、女の長かった
髪のことも。

俺はまたいつも通りこの部屋に違う女を入れ、飽きればまた違う女
を作る。

だが多分、特定の女を住まわせることはこの先一生ないだろう。

あの女が悪いわけではない。

そして俺が悪いわけでもない。

俺にあの女は真っ直ぐすぎた。ただそれだけだったのだ。

ああ……だけど、好きだと言っていたら、明日は変わっただろうか。
今となっては後悔すら意味がない。

少し痛んだ。

(柄じゃないと、女がいたなら笑うだろう)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2424j/>

少し痛んだ。

2010年10月18日19時41分発行